

20年度まで年2回発行していた「いつでも・どこでも・だれでも・なんでも・まなぶ」常陸大宮市生涯学習だより「DEMO (でも)」の編集委員が地域の「学びびと」を紹介します。

奥久慈漆の活性を目指して

木村 むねお 棟男さん (野上在住)



夏の早朝、諸沢地内(旧山方町)で、漆を搔く^{※1}姿がありました。木村さんは、奥久慈で漆搔きから木地挽き^{※2}・塗りまでの作業を、すべて行う貴重なひとりです。

～地域の財産～

奥久慈地域は、江戸時代からの漆の木が栽培され、樹皮から採る漆液が盛んに生産されてきました。気候と土壤に恵まれ、品質は日本一を誇り、北陸地方から搔き職人が集まるほどでした。

しかし、化学塗料の普及や、外国産漆の輸入、搔き職人の減少などにより、急速に生産が衰えてしまいました。

～地産地商～

茨城県は、そば粉に代表されるように、高品質の材料でありながら、他県の商品になる形態が多く、漆も一部を除きそのほとんどが県外の漆器に使われてきたのです。

1998年、漆の再認識と活性を目的に、山方町漆教室が開始され、木村さんは3年間塗りを学びました。さらに経験豊かな旋盤技術を活かし、盆や椀などの木地を自ら作り始めました。

漆を搔き、木地を挽き、塗り上げ、商品化を目指す姿勢は、教室終了者の模範であり注目されています。

現在、木村さんは漆で地域づくりを目指している「山方漆ソサエティー」の役員として、会の活動を支えながら、次の作品展に向けて作業に余念がありません。

※1 搔く 樹皮を削り、漆液を採ること ※2 木地挽き 漆液を塗る前の木材加工



木彫りに魅せられて

大越 忠司さん (長倉在住)



朝顔のカーテン・玄関先の玉石等ご自分で花壇の手入れもされている大越忠司さん宅をお訪ねしました。

～きっかけづくりは・・・～

木彫りを始めた原点は、若い頃下駄に彫刻をし、それが認められたことにあります。長年仕事一筋に過ごされ、数年前退職した時、生涯学習の情報紙を見た奥様に「お父さん、これやってみない」と勧められ、木彫り教室に参加した事が、今では、バードカービングや刻字に広がっています。今も教室に通いながら、自宅の工房で毎日2時間位、黙々と作品づくりに打ち込んでいます。

～地域に活かす～

バードカービングや刻字等の作品づくりには、たくさんの道具を駆使しての多くの工程があり、緻密さ・集中力・根気強さ・緊張感・体力等が求められます。また、彫り加減やバランス等、難しい事も多いそうですが、教室での仲間との会話や奥様と作品の感想を話し合ったりすることが楽しみだそうです。

作品は、近くの商店や友人宅に飾っていただき、多くの方に楽しまれ喜ばれていて、地域の方々との交流へも気配りされていることを伺い知ることが出来ました。

また、習得された刻字の技を活かそうと、寺の刻字や神社の祭り用刻字の復元に取り組み、地域文化の掘り起こしにも努力されています。「前向きに、長く続けることが大事」と、話される大越さんに、これからも健康に留意され、作品づくりに励んでいただきたいと思います。

